広島大学附属福山中・高等学校
中等教育研究紀要　第40巻

「総合的な学習の時間」に向けて
－体験的・実践的学習を担う教科の立場から－

小林　京子・高橋美与子

新学習指導要領において，「総合的な学習の時間」が創設され，授業時間数が減少する中で，教科の枠を越え，横断的・総合的に学習を進める機会が設けられた。生徒たちに将来の自立した生き方を考えさせるためには，基礎的・基本的な知識理解と共に，実践行動に移せる体験学習を通して技術力や応用力を培うことを車の両輪とした教育をしていくことが大切である。さらに，自然との共生，多くの人と共に生き支え合うような，他への思いやりのある心豊かで優しい人間教育も大切である。

そこで，本報告では，今までの家庭科教育においての体験学習の実践例やさらに，課題学習レポートに対して他教科の教科担任のアドバイスをもらい，課題研究を多角的総合的に深化させる学習を目指した，一種のクロスカリキュラム的な試行を実践してみたのでその様子を報告する。

1．はじめに

2002年からスタートする完全学校週5日制のもとで，学校の授業時間数は減少する。そうした中で，この度，文部省から告示された学習指導要領[1]では，各教科教育の内容は，基礎的・基本的なものに厳選されたり，各学校の創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開し，国際理解，情報，環境，福祉，健康など横断的・総合的な学習などを実施するため「総合的な学習の時間」が創設された。この「総合的な学習の時間」において，(1)自ら課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力を育てる。(2)学び方やものの考え方を身に付け，問題の解決や探求活動に主体的，創造的に取り組む態度を育て，自己のあり方生き方を考えることができるようにする。このことを主眼におき，学習活動として，自然体験，社会体験（ボランティア活動，就業体験）などの体験的な学習や問題解決的な学習を積極的に取り入れることを提示している。

こうした全体的方針・目標のもとに，「家庭」の目標としては，人間の健全な発達と生活の営みを総合的にとらえ，家族・家庭の意義，家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させるとともに，生活に必要な知識と技術を習得させ，男女が協力して家庭や地域の生活を創造する能力と実践的態度を育てることとしている。

全体的目標で，課題として例示してある福祉，健康，環境などは，特に領域としては設定してないが従来から家庭科の中心課題の一つとして取り扱ってきている。従って，私どもが願っている児童生徒の将来に向けての人間形成の育成に大きな力添えとなり，一層自信を持って日々の授業実践に打ち込みたい。

しかし，全体的にはすばらしい道しるべにもかかわらず，教育現場の実状は，個性重視と言いつつも，やはり受験システムの影響を強く受け，親のわが子に対する期待は永い将来のことよりも目先のことに振り回され，さらにそのことが生徒たちにも反映し，知識偏重となり，生活経験の場及び機会を奪うこととなっている。さらに，そうした親や生徒の願いに応える教育内容に偏りがちである。

また，すでに報告されている他教科の総合学習の実践例[2]をみても，その多くが少ない時間の中で，考え方やものの見方を養う域に留まりがちで，具体的に生活の場でどう行動するか，主体的行動，応用力を身につけるに至っていないように思える。受験システムのみによる弊害ではないが，このような生活経験の希薄化は，さらに多くの人とのかかわり，人間関係をも損ない，自己本位に陥りやすく，他を思いやる心優しい気持ちが欠如しやすい。また，少子化で親の子に対する期待の大きさから，過保護な援助では失敗経験（失敗から学ぶことも大きい）や時間を掛けてじっくりと考え学ぶことを避ける結果となる。その上，生徒もそのことを当然なことと受け止め，感謝の気持ちも失われてしまいやすい。

文明社会の中で，インターネット通信や電子メール等による映像や文字と対面した交流の手段も盛んになり，新しい情報を素早く入手できる利点もあるが，生の人間と直接対面することは，こうした機器を使っては味わえない人の心が互いに通じ合う捨てがたい交流である。今日の児童生徒の考え方・生き方・行動において，社会的

に取り上げられているような問題が生じる一つの原因は，こうした家族を含め人との交流や生活経験の欠落がかかわっていると思う。

常日頃から，共に生き，共に支え合うことの大切さや「知識として知り，わかる」ことと「できて，わかる」ことは違うことを信条に据えて教育に携わっている者として，人との交流や生活経験に時間を掛けて取り扱う実技教科の重要性を改めて痛感する。

従って，これからの教育において授業時数が減少する中で，教科の枠を越え，横断的・総合的に学習を進める機会が設けられたことは大いに歓迎し，今までの教科の特性を生かし，積極的に参加したい。将来の自立した社会生活においては，基礎的知識と具体的行動実践が共に備わり，人とのコミュニケーションがはかれることが大切である。是非，教育課程を組む際には，知識偏重になること無く，車の両輪のウエイトを持って決定していきたいものである。

そこで，この度の報告では，今まで実践してきたことで，先に発行された本校の報告書[2]に未掲載の実践例とそれに付加して，生徒の課題研究に他教科の教科担任のアドバイスを取り入れて再度生徒に還元し，課題研究を多角的に深化させた試みを報告する。

2．新学習指導要領の目標と関連深い今までの実践例

以下の実践例は，既に本校の研究紀要や広島大学教育学部学部・附属共同研究体制の研究紀要及び家政教育社発行の「家庭科教育」に報告しているので詳細は省略し，主な点を掲げるに留める。

(1) 課題研究[3]

高等学校での家庭科が男女共に学ぶ教科としてスタートした時（1994年度）から継続して実践している。1年生の当初，「家庭一般」の学習に当たって家庭科の学習の意図の提示と共に，視野を広め世の動向を知るために，情報源の1つである新聞記事のうち，家庭生活に関連が深く興味関心の高いものを1人3件選んで切り取り，記事として取り上げられた社会的背景や何が問題なのか，自分たちの生活との関わりやどう対処したらよいかなど自分の意見及び感想をまとめる課題を提示する。平素，新聞はテレビ番組やスポーツ欄以外は目を通すことの少ない生徒たちが，「家庭欄」を中心に読み，自分なりの受け止めや記載者等の考えを読み取る作業を通してまとめる。さらに発展させ，表－1に示す課題研究テーマ領域のうち，個の興味関心に応じていずれか1つ選択し，同じテーマ毎にグループを形成し，個人の課題研究のまとめと同様なことを同年輩の友人と意見交換しながら模造紙にまとめる（写真1）。まとめた模造紙は教室に掲示し，その領域の学習をするとき，取り上げて活用すると共に，他学年の生徒も読むことができるし，校内行事の学友祭でも展示発表し，多くの一般の人にも読んでもらう機会を設けている。

表－1　課題研究テーマ領域

a．家族のあり方について
b．男女の役割分担・格差について
c．食生活について
d．衣生活について
e．住生活について
f．環境問題に関して
g．保育に関して
h．高齢者の問題について
i．その他

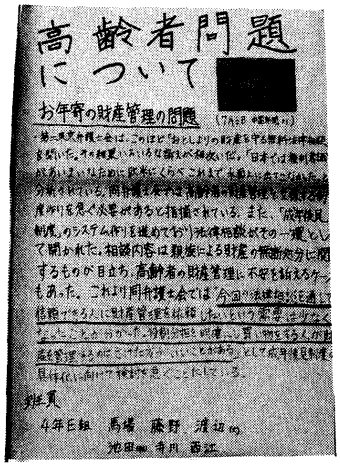


写真1

こうした課題研究は，教師の考えを押しつけることなく，しかも日常友人との会話では取り上げないことを友人と意見交換するために，伸び伸びとした雰囲気のうちに世の動向や自分たちとのかかわりについて考え，互いの行動実践への励みとしている。

(2) 交流体験

①乳幼児とのふれあい体験[4]

今日は，合計特殊出生率が1.4未満と低下し，兄弟姉妹数は少なく，高校生が家庭内で乳幼児と接する機会や親が乳幼児を保育している様子を見る機会はほとんどない状況にある。従って，乳幼児の心身の発達の特徴やどのようにかかわったらよいかわからない。多感な思春期に乳幼児に接し，特徴やかかわり方を経験することで生命の大切さやいたわりの気持ちを抱き，将来親（大人）としてどうあるのが望ましいか心構え

を育成できる。このことを願って，高校２年生の保育領域の学習時に学校の近くの保育所（０～５歳児が入所）に出向き交流体験をする。まず，子どもの発達段階に応じて特徴を観察し，発達段階に適するおもちゃを作り，再び出向いて自分たちの手作りのおもちゃを使って一緒に遊び，交流をする。幸いにも保育所側にとっても，乳幼児が高校生の兄や姉に接する機会がほとんどないので喜んで受け入れに応じて下さっている。

僅か２度の交流体験であるが，交流時の生徒の様子は生き生きとし（写真２），慣れない様子の中にも乳幼児の気持ちを大切にしている。また，市販品でなく身近な材料を活用してのおもちゃ作りでは，乳幼児が気に入って楽しく遊んでくれることを願って，グループで色々アイディアを出し合っている（写真3）。こうした，身近にある材料でおもちゃを作ることは，将来親（大人）になった時，子どもと一緒に作ることの意義もわかってくることであろう。

写真２

写真３

②高齢者との交流

１）高齢者との対話[3)、5)]

毎年，高校1年生の夏休みに「高齢者との対話」に取り組んでいる。核家族で，高齢者と一緒に暮らしていない生徒はもちろんのこと，平素一緒に生活している生徒でも，生活時間のずれや自分のことで精一杯で，膝を交えてじっくりと祖父母の昔の生活（衣・食・住・遊び・その他色々）について話すことは少ない状況である。そして，高齢者に対して多くの者が「暗い，口うるさい，頑固」などとイメージし，自分たちとは話が合わないと決め，受け入れる姿勢が弱い傾向にある。しかし，実際に顔を合わせ，昔を懐かしみ，身振り手振りを交えてとてもうれしそうに話してくださる様子に，先のイメージは崩れ，昔の生活の大変さに驚くとともに自分たちの贅沢さに気づいている。さらに交流の大きな成果は，高齢者の人は，自分たち（孫）と話し合うことに大きな喜びを味わっておられる様子に感激し，今後積極的に話し掛けていきたい姿勢が起きてきていることである。また，対話を通して高齢者の生き方に触れ，高齢者の理解と共に，自分自身の高齢期に向けての生き方を考えるきっかけともなっている（表－２）。

表－２　高齢者との対話から

今までおばあちゃんと話をしているとしょっちゅう「戦時中は……」，「戦後は……」というのでいつも「おばあちゃんはそのことしか話すことがないんだ!!」ってすごくみくびっていましたが，今日こうしておばあちゃんとじっくり話をしてすごくおばあちゃんが昔の思い出を大切にしているんだなあって思いました。これからも時間のある時はおばあちゃんと話をしたいです。

私は今まで老人と話していても全然話にあわないし，耳がとおくてすっごく大きな声でないと話し出来ないから話をするのがすごくゆううつでした。けど今日こうして私達と全く違った時代を生きてきたおばあちゃんの話を聞くと，思いがけないようなことがあったりして，それを聞いているのがすごく楽しくなってきました。これからもおじいちゃん，おばあちゃんの話し相手となり，私と話す時間をすごく楽しく過ごしてもらえるようにしたいと思います。そして私自身，孫が生まれた時自慢できるような日々を過ごせたらいいなと思います。

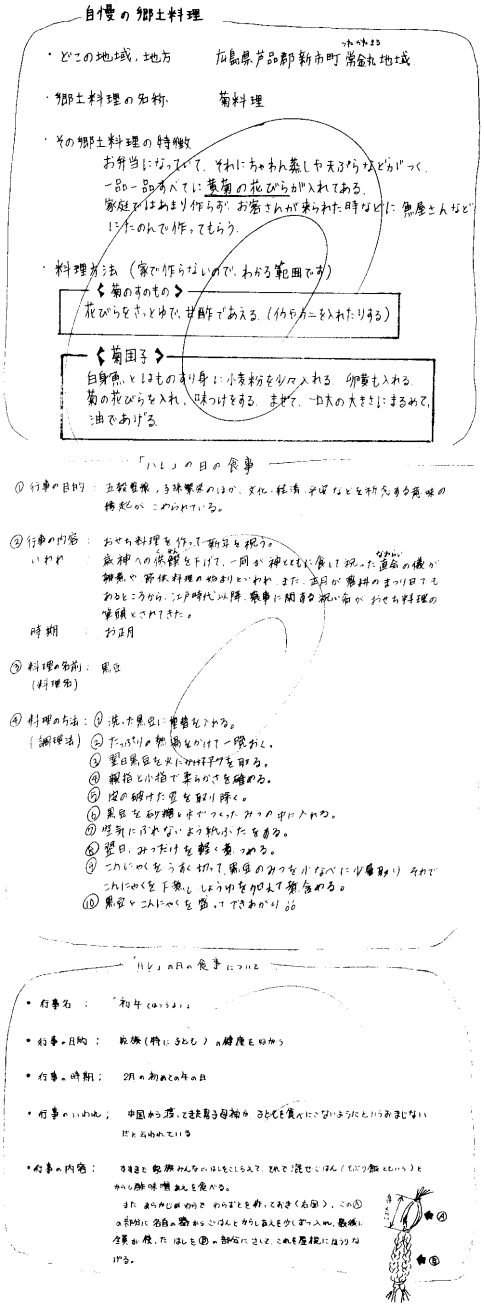
２）伝統文化の継承

高齢者の生活は，今日のように家事労働の機械化・電気化や社会化が進んでおらず，体を使い，自然界の現象や恵みを大いに活用しての生活であり，工夫や理にかなった知恵が多く生かされている。そこで，高齢者の人と一緒に伝統的なもの作りをしながら技術や知恵の伝授をしてもらうことを試みてみた。

＜伝統食作り[5)、6)]＞

中学校３年生の冬休みに，家事の手伝いや家族とのコミュニケーションを兼ねて，地域の伝統食やお節料理について調べ，よく用いられる食材のいわれを尋ねたり，代表的な料理をつくってみることをしている（表－３）。

表－3　伝統食やお節料理について



自慢の郷土料理

・どこの地域，地方　　広島県芦品郡新市町常金丸地域

・郷土料理の名称　　菊料理

・その郷土料理の特徴
お弁当になっていて，それにちゃわん蒸しや天ぷらなどがつく。
一品一品すべてに菊の花びらが入れてある。
家庭ではあまり作らず，お客さんが来られた時などに，魚屋さんなどにたのんで作ってもらう。

・料理方法（家で作らないので，わかる範囲で）

〈菊のすのもの〉
花びらをさっとゆで，甘酢であえる。（作り方にもよるが入れたりする）

〈菊団子〉
白身魚，とうものすり身に小麦粉を少々入れる。卵黄も入れる。
菊の花びらを入れ，味つけをする。まぜて，一口大の大きさにまるめて，油であげる。

「ハレ」の日の食事

① 行事の目的：主穀豆類，多様果実のほか，文化，経済，宗教などを新たな意味の構成がこめられている。

② 行事の内容：おやち料理を作って新年を祝う。
いわれ：歳神への供物を下げて，一同が神とともに食べて祝った直会の儀が雑煮や節休料理の始まりといわれ，また，正月が農耕のまつり日でもあるところから，江戸時代以降，農事に関する祝い事がおやち料理の中頭とされてきた。
時期：お正月

③ 料理の名前：黒豆
（料理名）

④ 料理の方法：（調理法）
① 洗った黒豆に重曹を入れる。
② たっぷりの熱湯をかけて一晩おく。
③ 翌日黒豆を火にかけ予熱を取る。
④ 親指と小指で黒豆のかさを縮める。
⑤ 皮の破けた豆を取り除く。
⑥ 黒豆を砂糖水でつけたみつの中に入れる。
⑦ 湯気にぬれないよう紙ぶたをする。
⑧ 翌日，みつだけを軽く煮つめる。
⑨ これにやくを少く切った黒豆のみつを少なめに少量取り，それでこれにやくを手塩しょうゆをかけて強火にする。
⑩ 黒豆とこんにゃくを盛ってできあがり。

「ハレ」の日の食事について

・行事名：「初午（はつうま）」

・行事の目的：疫病（病にさわらし）の撃退を祈る

・行事の時期：2月の初めての午の日

・行事のいわれ：中国から渡ってきた馬頭観音信仰が，子どもを食べにこないようにとおまじないだと広められている

・行事の内容：まずまと，疫病神のほしをこしらえて，それで洗せこ（ちびっ子）にかけ，ちびっ子にもかけるようにとの意味で，あんを食べる。
また，まらかじめのりさ，わらずとを作ってあさく（右図），この③の部分に名前の数だけのじゃんとからしあんを少しずつ入れ，疫病に食べ残した，ほしを②の部分にさして，これを屋根にはりなげる。

高等学校１年生では，先の対話から生活の中に行事を大切にした料理，「ハレ」と「ケ」の節目があることを学んでいる。今日では生活の節目に関係なくいつでも必要に応じて入手ができるものが多く，たとえ口にしてもどんなことと関係があるのか知らないことが多い。そこで，比較的馴染みの深い「おはぎ」作りを高齢者の人を学校に招いて共に作り，技術や知恵の伝授をしてもらった（写真４）。また，できあがった「おはぎ」を一緒に食べながら名前の由来を聞いたり，その他の話題も含め交流を深めた（写真５）。生徒たちは，改めて高齢者の人の経験の豊かさや手際の良さと同時に物知りであることに驚いている。そしてこの経験を意義深く感じていた（表－4）。こうした交流は継続したいが校内での協力体制を得るまでには時間を要す。これからの「総合的な学習の時間」には是非実施したいものである。

写真４

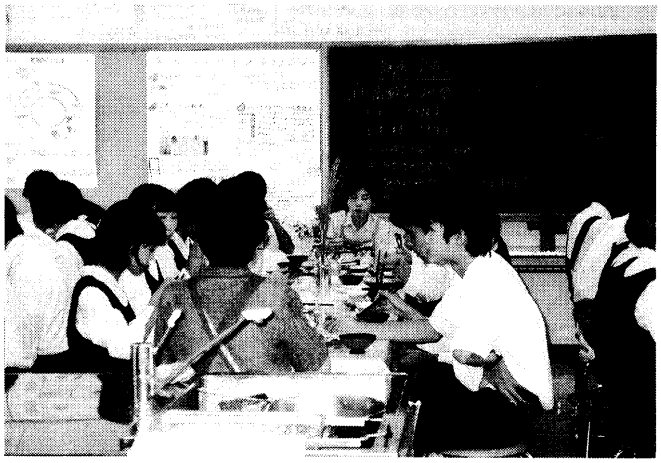


写真５

表－4　生徒の感想

今までは，自分の好きな味にすればいいかと思っていたけれど，今日実習をしてみて，やっぱり食文化（味付け）の伝承は大事だなあと実感しました。

交流は楽しかった。それと，食文化を継承してもらわなければ，調理中止なってしまうような時も多いと思うので，家庭等で積極的に学ぼうと思う。

＜浴衣の製作＞

現代の生徒たちは，和服の着用には憧れを持っている。平素着用しやすくしかも比較的製作が容易なものに浴衣

がある。和服の製作者が今日少なく，親に尋ねても分からない家庭が多いが，高齢者の人の中には比較的多くの人が製作技術を持っておられる。自分で着用する浴衣を作ってみたいと意気込む生徒が数人いる。そこで，高校２年のホームプロジェクトの１つとして祖母からの伝授で製作に取り組み，出来上がった喜び・感動は隠せず，作品と共に着用した写真（写真６）を持参して披露している。

写真６

製作する過程で，色々工夫がされている知恵の伝授も受けており，その理にかなったやり方にも驚かされている。自分の体で覚えた理屈，知恵なので，きっと今後多方面にも応用が利くことであろう。

③ボランティア活動[7]

高校２年生の夏休みに，ホームプロジェクトに代えての問題解決学習の一つとして，積極的希望者にはボランティア活動のチャンスを与えている。平素では経験し難い特別養護老人ホームでの介護経験をしてみたいと申し出る生徒に，その施設を紹介している。２学期になって各自取り組んだ問題解決学習の様子を発表する場を設定し，互いにその成果を分かち合い，各自の生活に受け入れられることは積極的に取り入れ，生活の改善向上に役立てる。ボランティア活動をした者も体験の様子を発表し，他の生徒は，同年齢の仲間の経験ということもあり真剣に耳を傾けて聞き，その発表をもとに間接的に体験する事で入所者の理解を少し深めている(表－５)。

表－５　特別養護老人ホームでの体験

特別養護老人ホームでの体験の記録及び感想（要約）

Ａさん

高校生の間に一度老人福祉の現場で、直に介護などの実地体験をしてみたいと思い、夏休みを利用して、特別養護老人ホームへ３日間実習に行くことにした。

高齢化社会と言われるようになってずいぶん経つが、初めて自分の身を持って体験できたと思う。特に感じたのは、人手が足りないことと、公的なサービスがまだまだ不十分ではないかということである。これは自分で新聞などを調べてみて改めて感じた。

Ｂさん

福祉については前から関心があり、ボランティア活動というものを一度はしてみたいと思っていたが、中学生の時には経験できなかったので、このホームプロジェクトの機会を利用してやってみようという気になった。また、老人ホームに決めたのは、今、高齢化が問題になっている中で、新聞などから得る知識や情報だけでなく、実際に自分で体験してみて、何が本当に問題とされているのかということを少しでも分かることが出来たらよいと思ったからだ。

初日、緊張しながら、廊下でお年寄りに頭を下げ、声をかけた。ほとんどが痴呆だが、まだ知らず、無反応に戸惑った。寮母さんは印象的で、私たちの挨拶に快く答えてくださり、明るく元気な人たちでうれしくなった。寮母長さんの説明を心して聞いた後、介護に入った。お昼で、食堂はお年寄りでいっぱいだ。食事は様々だった。細かく刻んだおかずや、おかゆの人もいれば、普通の食事の人もいた。私が介護させていただいたおばあちゃんは、箸やスプーンが持てず、首が前にだらんと下がっている人だった。戸惑っていると、おばあちゃんは、柔らかいおにぎりを手で食べ始めた。おにぎりにしているのは手で食べられるからなのか。困っていたら、他のおばあちゃんが、さじで食べさせてあげてといってくれた。しかし、私は、聞き取りにくいその言葉に、とっさに箸をおばあちゃんの口へ持っていき、拒絶された。味噌汁などをこぼしたりもして嫌になった。でも、必死に私の判断で、食事を口に運んでいたが、一度おばあちゃんに食べたい物を尋ねると、指で教えてくれた。私も落ち着いてきて、周りの助けも借り、食事を終えることが出来た。前にいたおばあちゃんが誉めてくれ、本当にうれしく、次はもっとうまくやるぞと思った。とは言うものの、やはり介護したおばあちゃんには悪く思い、後で、今日初めて来たことを告げ、謝った。近くにいた寮母さんが、孫みたいでいいねと声をかけてくださり、おばあちゃんがとてもうれしそうな表情をされたので、私も話がはずんだ。

そのおばあちゃんとの思い出は尽きない。おふろに入る前に私を呼び、私の手をとって字を書き始めた。とても感動した。その時の用事が、化粧水を持ってきてというものだったのも忘れられない。化粧水を顔につけ、銀髪だかたっぷりある髪をとかし、きれいねといってあげると、おばあちゃんは照れながらもうれしそうだった。他にも、沢山の方とお話をし、遊んだが、このおばあちゃんは特に私と仲良くなってくれて、最後の日に私の「今日でもう帰るんよ。」という言葉に、泣きだしてしまった。私も、その場はなだめたのだが、気がかりだった。しかしその後、家族の方がこられ、おばあちゃんは幸せそうだった。良かったと思ったが、もう私に目を向けてくれないおばあちゃんに、ちょっとさみしくなった。３日間だったけれど、この空気にとけ込んでいる自分に気が付いた。

私はここにくる前、母に、老人の世話は赤ちゃんとは違い、大人だから大変だといわれた。下の世話のことだ。私は進んでやる覚悟をしていた。実は私のひいおばあちゃんは中学２年の夏に90歳近くで亡くなる何年か前から痴呆だった。祖母が世話をしていたが、最後は病院へ入れざるを得なくなり、私は病院へ行けぬまま、お葬式を迎えた。今回の訪問は、そういうことも頭の隅にあった。祖母が「やってみたもんでないとわからん。」といっていたことが実感できた。最初はおしめ交換も、ポータブルトイレの始末も抵抗があったけれど、すぐに慣れ、自分にもできたという満足感も持てたのは良かった。今まで、新聞やテレビの映像から得る情報だけで物足りなかった、満たされなかった気持ちが、少し埋められた。

この仕事は、始終体を動かし、とても充実していた。しかし、寮母さんはもっと沢山のことをされ、体力も必要で、本当に大変だなあと思った。しかし、快活で、溢れるような愛情を持って、心からお年寄りに接しておられるのにとても感動した。お年寄りも安心して生活していけるし、ここに重度の痴呆老人がいないのも、寮母さん達のおかげではないかと思えてきた。

実習後、私はお年寄りに敏感になった。(何歳かな。お元気そうだな。)と思ったり、心の中で、(元気で頑張って。)と声をかけたりする。見方が変わったと思う。本当に何事も経験することが大事ではないだろうか。私はまだ、17歳だが、その４～６倍も生きてこられた方のお世話をさせていただいて、沢山のものを得たような気がする。すべて自分のためになるものばかりだ。おじいちゃんおばあちゃんに心から「ありがとう。」といいたい。私はこれからも積極的にいろいろなことを経験してみようと思う。

発表を聞いた他の生徒の感想

Ⅰ　高齢者について
・お年寄りや子供はべらべらしゃべらないぶんナイーブ。私たちの思っていることがストレートに伝わる。
・子供を扱うのと別の意味でとても大変だと思った。
・70歳代の人は生活が大変である。
・70歳代の人は苦情が多いが、80歳の人は落ち着いているのが興味深い。

Ⅱ　特別養護老人ホームの仕事について
・老人ホームで働くのは大変。しかしこれからは老人ホームは足りなくなるだろう。
・頭で考えているのとそこで世話をするのとは全然違う。考えている以上に大変だったであろう。
・よくやったな。
・病院でも大変ということだから、一日中老人ホームで勤めている人は肉体的・精神的に大変だろう。
・老人福祉の大変さを感じた。

Ⅲ　介護実習の姿勢について
・「してあげる」という言葉はニュアンスが違うと思う。ボランティアというのは気軽に出来るようになっているが一体どれだけの人が本当のボランティアをしているのであろうか。
・介助してあげる、あげたではなく介助させて貰ったという考えでやったのか。それなら人間的に成長したのではないか。してあげると思うことはそれだけで差別である。でもそんなことはないようだった。
・このような発表では言葉遣いが気になる。「してあげる」か「手伝う」か。微妙なニュアンスが違って来るのでとても気になる。でも、実体験がないので何ともいえない。
・福祉は難しい。

Ⅳ　社会福祉の今後の課題について
・男性の福祉への参加という点に共感した。しかし実際には、凄く大変なことである。
・ボランティアの重要性を感じた。
・これからこういうことが大事になってくるだろう。
・老人ホームで働く人が、多く必要になって来るであろう。
・施設、設備、人手、労働条件など改善点が沢山ある。
・これからは老人ホームは足りなくなるだろう。
・専門の人がいないと大変である。
・介護は家族が一番であろうけれど、出来ないこともある。心を込めてするのが一番である。
・ひと事でなくなってくる。
・私もおじいさんおばあさんを大切にしよう。
・10代の私たちがもっと身近に考えなければ。
・自分が祖父祖母にしてあげなければ。

Ⅴ　体験の意義について
・二人はいい体験をした。
・老人ホームでの介護を経験してみたかったが、経験できなくて残念だった。
・以前学校で老人ホームへ行った時、喜んでくださった笑顔が今でも心に焼き付いている。こういう体験は一度するべきである。
・凄いことをやり遂げたようで良かった。
・二人の経験は一生ものだ。
・体験がないので聞いたことが新鮮だった。口では何とでもいえるが、体験しないと本当のことは分からない。
・実際手伝ってみないと分からない。
・もっと深く様々な問題があることを深く感じた。実際の問題は考えていたことの比ではなかった。

Ⅵ　ホームプロジェクトの発表について
・こういう体験談を初めて聞いてためになった。
・すごく詳しく話してくれて良かった。
・表にまとめてあり、分かりやすかった。
・いい勉強をした。

(3)　環境教育

家庭科教育においては，すでに十数年前から生活に直結した問題として，自然との共生共存の視点に立ち，地球に優しい行動について考え，自分たちにできる小さな一歩からの実践に取り組んでいる。例えば，合成洗剤等の生活排水による河川の汚染，CO_2発生に伴うオゾン層破壊や地球の温暖化，海面の上昇，さらに付随して土地の浸水，有限資源の枯渇問題，ゴミ増加と埋め立て地不足等々の問題に対処する実践活動である。

①プリンせっけん作り[8)]

毎年中学３年生を中心に，年１～２回作り，調理実習時の洗いものに活用している。これによって，調理実習で多量に生じる油の後処理の問題解消，河川汚染に比較的優しいせっけんの使用，洗剤購入経費の節約，さらに，希望生徒には家庭へ持ち帰らせることで家族への普及活動につなげることができる（写真７），（表－６）。

写真７

表－6　プリンせっけんを使っての感想

油を捨てずにすむし，合成洗剤で川を汚す心配がなくなるし，本当に一石二鳥だと思います。
家でも使いたいので今度ビンを持ってこようと思います。
あわがよく出るのでびっくりしました。

プリン石けんは，初め，何となく敬遠してしまいましたが，使ってみて，思ったより泡立ちがよく，気もちよくよごれが落ちるなあと思いました。油汚れもスッキリ落ちるなんてビックリです。

②省エネ・節電対策

家庭生活の中でCO_2発生の源となっているものの1つに電化製品の使用がある。高校2年生のホームプロジェクトのテーマに節電対策を選んで取り組む生徒がいる。節電を意識した生活と意識しないときの電気の使用量を比較し，実態を数値で表してその効果の大きさを実感し，以後の行動に生かしていく努力をしている。具体的にどんな行動を意識したかレポート発表によって他の生徒へもアピールする。不要な明かりはこまめに消すとか，冷房の設定温度で外気温度との差を異常に下げない（約5℃以内），冷蔵庫の開閉を減らす工夫，テレビの主電源は切る等々，少しの努力で可能なことばかりではあるが今までの習慣で身に付いている行動を改めることには意識しての行動で改めていかねばならないと報告する。

③ゴミの減量

今日，ゴミ焼却に伴うダイオキシン発生や環境ホルモンの体への害が社会的に問題視され，対策が政策上からも提示されてきている。学校におけるゴミ焼却炉の廃止に伴い，ゴミ処理が外部の処理業者に委託されるようになり，校内的にもゴミの分別に心掛けている。しかし，問題はゴミの量にもある。ゴミの分類のうち，最も多いいのが包装容器である。そこで，家庭科教育では，ゴミの減量対策を取り上げ，自分たちにできる行動実践につなげている。例えば，商品購入時には，使用後のゴミ処理のことを考え，簡易包装のもの，リサイクルまたは再利用が可能か否かを考えて選んだり，買い物袋を持参するなど，行動に移せる具体例を互いに話し合う。さらに，家庭において，家族で話し合い，具体的に取り組む目標項目を決め，環境家計簿として記録を取り，行動を見つめ直していく取り組みをしてみた[9]。

(4)　生活講座[10]

毎年，家庭科教育の1つとして，高校1年生を対象に外部講師（小児科医や弁護士）を招き，専門的立場から食にかかわる今日的問題や青少年期における望ましい食習慣についての講義を聴いたり，若者の陥りやすい商品取引にかかわるトラブルについて，具体的事例を取り上げながら対処の仕方を聞く機会を設けている。専門的立場からの講義で，生徒たちは興味深く耳を傾け，日頃の生活や今後の生活に思い出して生かすものと思う。

以上のように，家庭科教育では，知識として「知り，わかる」段階からさらに進んで，小さな一歩ではあるが自らの体験を通して，人の心に接し，肌に触れ，手を動かし，実技として身につけていく実践活動をしている。青少年時代のこうした体験は，将来の進路選択で未だ柔軟に対応できるときに，自らの生き方を模索できるとても良いチャンスにもなるものである。

3．「総合的な学習の時間」に向け試案としての実践例

(1)　実践の方法

この試案は，先述した高校1年生の当初に実践している課題研究に対して，研究内容によって関連の深い教科担当の先生にもレポートに目を通してもらい，その教科の立場からアドバイスをしてもらい，そのアドバイスをもとに，レポート内容を見直し深化させる。つまり，ひとりの生徒が課題研究に取り組み，まとめていく過程は

①興味関心のある内容の課題研究に取り組む
②関連の深い教科担任のアドバイスを受ける
③そのアドバイスをもとに内容を多角的に見直す

こうすることによって，1つのテーマ内容を多角的にかつ総合的に自分の知識理解として把握できるのではないかと思うからである。

提出されたレポートの内容のうち，この度は，次の教科担任の先生にお願いしてアドバイスをいただいた。

a，環境問題に関するもの（ダイオキシンや環境ホルモンについて）---理科教育担当者
b，環境問題に関するもの(シックハウス症候群対策への取り組みについて）--社会科教育担当者
c，男女の役割分担に関するもの(男女差別や男女雇用機会均等法について）--社会科教育担当者
d，男女の役割分担に関するもの(スポーツ界の女性進出について）--保健体育科教育担当者

e，衣生活に関して(衣服内気候について) ――保健体育科教育担当者

f，家族のあり方に関して(高齢者の問題について) ――ホームルーム担当者

以下に，比較的多くの者が取り組んでいた環境教育に関するもの（環境ホルモン）のレポートについての例を提示する。

(2) 実践例

1）課題研究レポート例（表－7）

表－7　レポート例　（環境ホルモンについて）

○環境ホルモン(内分泌撹乱物質)とは，人間が広範に使用し，環境に蓄積させてしまった合成化学物質のうち，ヒトをはじめとする様々な動物の内分泌系を狂わせる汚染物質のことである。代表的なものに，DDTなどの農薬，PCB類などの工業化学物質，ダイオキシンなどの非意図的生成物，合成女性ホルモンとして使われたDESなどの医薬品などがある。生物がこれらの物質をわずかでも発生初期に浴びたり，長期的に浴びたりすると，内分泌系，免疫系，神経系に様々な形で異常を引き起こすことが分かってきた。

○環境ホルモンの極だった特徴として，「内分泌系をかく乱する」ことが挙げられる。内分泌系とは，生物がごく微量の「ホルモン」という物質を使って，体を成長させたり，調節したりする一連の仕組みのことである。問題になっている人工の化学物質は，生物の体内に取り込まれると，このホルモンを用いた情報伝達経路に，この情報を流したり，通信妨害を行ったりすることで，体の正常な機能をじわじわと，奪っていく。内分泌撹乱物質のこのような作用は，それぞれ，「ホルモン様作用」「ホルモン阻害作用」と呼ばれている。

○環境ホルモンとして働くことが明らかになった汚染物質の多くは，実は以前から環境にばらまかれ，様々な被害を引き起こしてきた馴染み深い物質である。たとえば，ダイオキシンやカドミウムは，これまで発ガン性や，急性毒性ばかりに焦点があてられてきたが，見方を変えれば，典型的な内分泌撹乱物質であった。最近になってようやく，環境中の物質が，ホルモン性作用やホルモン阻害作用を示すことが分かってきた。貝類や魚類のメス化現象，鳥類の奇妙な行動，哺乳類の生殖系異常などのばらばらな環境汚染としてとらえられてきた様々な現象を結びつける「内分泌撹乱」という鍵が見えてきたのである。発ガン性や，急性毒性といった従来の毒性ではなく，この内分泌撹乱作用というとらえ方こそが，環境ホルモンの新しさである。今までの化学物質汚染も，もう1度，環境ホルモン問題として見直す必要がある。

○すでに，体内に入ってしまった環境ホルモンを完全に外へ出すことはできない。私たちの課題は，環境ホルモンをどう対処するかということだ。'70年代の母乳汚染は現在の2倍であったといわれている。私たちに何ができるのか。まずは，環境ホルモンへの知識を深め，身近にできることを「言う」ではなく，「実行する」ことではないだろうか。

参考文献：「環境ホルモン入門」－立花隆，新潮社．

2）教科担当者からのアドバイス例

教科担当者からのアドバイスは，同テーマ研究者に対して一括のものである（表－8）。

表－8　環境ホルモンのまとめを読んで

○○さんが参考にされた立花　隆の「環境ホルモン入門」（新潮社)は、東京大学教養学部の立花隆ゼミの学生が、インターネットや色々な文献を活用して調べたものを一冊の本にまとめたものである。最初の動機は、極めて単純なところにあったようだ。その意味においても、皆さんに最後まで是非完読してほしい書物である。内容的には５年生で学習する生物ＩＢの知識が必要であるが、多少理解できなくても書物から湧き出てくる熱意が感じとれると思う。また、環境ホルモン特にダイオキシンについて比較的読みやすい形でまとめてあるのが、酒井伸一の「ゴミと化学物質」（岩波新書）がある。ダイオキシンの発生メカニズムや毒性および将来的なクリーン・サイクル・コントロール戦略まで、幅広く述べられている。

当校では、1998 年４月より「ゴミ処理新システム」を導入し、ゴミの分別収集を実践している。分別されたゴミ類のうち、缶類や瓶類および古紙・ダンボール類は、リサイクルに回されている。ダイオキシンの発生の原因となるといわれているプラスチック類は、紙類と分けるようになっている。さて、皆さんはどうされているでしょうか。日常生活の慣れに流されていないでしょうか。このようなまとめをされることも大事なことですが、まとめたあと自分の生活を省みることがもっと大事ではないでしょうか。皆さんがまとめられた文章を読んでみると、「身近にできることを実行する」とある。まさにその通りだと思う。現在の私たち一人ひとりができることは限られていて、小さいことでしかないかも知れない。しかし、学校生活や日常生活の中には、環境問題について取り組むことができることは以外と沢山あるように思う。是非それを自分で見つけて１つでも実践してほしい。

3）再提出レポート例

家庭科教育の立場の他に，理科担当教科の先生からのアドバイスをもとに，再度認識を新たにしたり，社会的に問題視されるニュースに過敏に反応する姿勢や自分に実践可能なことの整理をしている（表－9）。

表－9　再提出レポート例

・レポートの丁寧な感想をありがとうございました。
・今回，私達は環境ホルモン全体の表面的な調査しか，行いませんでした。ただ，表面的に調べた「環境ホルモン」からでも，身の回りに漫延していることが分かり驚いたというのが正直な感想です。名前は忘れましたが，先日，ニュースで新しく環境ホルモンとされたものを見ました。今後もまた，新しい環境ホルモン，またはそれに似た新しい物質が出てくるのかと思うとぞっとします。
・先生が書かれておりました「ゴミの分別」は私自身とても大切なことと思っており，きちんと実行しています。私がこれ以上環境ホルモンを増やさないためにできることとして思いつくのは，これぐらいなのです。
・茨城県東海村の原子力施設での事故や，私達に降り注ぐ酸性雨，オゾンホール，など最近では，肉眼では見えない環境汚染（そもそも，空気というもの自体肉眼では見えませんが）が広がっております。自分自身，そのことをしっかりと自覚し，一日，一日の生活の中で今回の調査を役立てていきたいと思います。

(3)　結果及び反省

それぞれの教科教育担当者は，生徒の研究に対して感想やさらに深化させると良い示唆，具体的な資料の添付や書物の紹介等してくださっていた。あるいは，内容に関してのみでなく，レポートのまとめ方や安易な資料（インターネットからの資料の転載等）の用い方に対しての注意もあった。つい，私たちも見落していることで生徒と共に，今後このようなまとめに対して十分気を配っていく必要を痛感したところである。

再提出した内容を見ると，その多くがアドバイスをして下さった先生へのお礼の域にとどまり，当初目標としていた多角的視点に立っての研究深化に至っていないのが残念である。この大きな原因は，他教科の先生にアドバイスをしていただくことの意味が十分に生徒に徹底していなかったためであろう。また，生徒も1つの教科での課題研究レポートで短絡的に終えてしまい，いろんな角度から多角的に見つめ，幅を持たせて深化させる学習の仕方が身についていないからであろう。1つの事象をいろんな角度から検討する学習は大切なことであるが，生徒たちは余分なこと（自分の独自の価値判断に依ることが多い）には，努力することをためらう傾向が普段の学習の中にもよく見受けられる。今後は，このような学習の機会を大いに取り入れることによって，真の学習の仕方を学んでいくのではないかと思う。

4．今後への課題

はじめに提示したように，生徒たちに将来の生き方を考えさせるためには，基礎的・基本的な知識理解と共に，実践行動に移せる体験学習を通して技術力や応用力を培うことを車の両輪にした学校教育であらねばならない。そして，さらに，自然を含めて他を思いやる優しい心豊かな人間教育を目指したいものである。

この度は，個人的な依頼によって他教科の先生にアドバイスをしていただく方法であったが，新しい「総合的な学習の時間」の実践に当たっては，クロスカリキュラムを取り入れられるような組織作りを提案したい。そして，各教科が横断的にその特性を生かし，さらに，生徒には多角的・総合的に捉えていけるように，まず，教師の共通理解を希望する。

最後になりましたが，今回の取り組みを実践するに当たり，お忙しい中ご協力して下さった各教科の先生方に深謝いたします。

参考文献

1）文部省　高等学校学習指導要領　大蔵省印刷局
平成11年3月
2）広島大学附属福山中・高等学校　「総合的な学習の実践と考察－総合的な学習実践事例集－」
1999年8月
3）岡本祐子・福田公子・小林京子・三宅美与子
西　敦子　「高齢化社会に関する家庭科授業の実践

的研究Ⅲ－－総合的課題研究活動を導入した授業実践の効果－－」　広島大学教育学部学部附属共同研究体制　研究紀要　第23号　1994
4）小林京子・高橋美与子　「乳幼児とのふれあい体験学習の成果－非体験学習者との比較から－」
広島大学附属福山中・高等学校　中等教育研究紀要　第37巻　1997
5）小林京子・高橋美与子　「伝統的な食生活(食文化の継承）－－高齢者との交流体験から－－」
広島大学附属福山中・高等学校　中等教育研究紀要　第39巻　1999
6）福田公子・佐藤一精・平田道憲・木下瑞穂・小林京子・高橋美与子　「家族・家庭生活の価値観の形成に関する授業の効果（Ⅱ）－－高齢者が調理実習授業に参加した事例－－」　広島大学教育学部学部附属共同研究体制　研究紀要　第27号　1999.3
7）岡本祐子・福田公子・小林京子・三宅美与子
西　敦子・橋本尚美・原田圭子　「高齢化社会に関する家庭科授業の実践的研究Ⅱ－－発展学習にみられる福祉思想と共感的理解－－」広島大学教育学部学部附属共同研究体制　研究紀要　第22号　1993
8）小林京子「家庭科教育における消費者教育（第2報）－実践例(住生活領域における試み）－」
広島大学附属福山中・高等学校　中等教育研究紀要　第31巻　1991
9）小林京子　「過大包装問題についての授業」家庭科教育　68巻　14号　1994　家政教育社
10）大澤仁絵・小林京子　「自主・自立をめざす家庭科教育－－「生活講座」の実施－－」
広島大学附属福山中・高等学校　中等教育研究紀要　第29巻　1989